

#### 1443 Graves病における<sup>131</sup>I治療とリチウムの併用療法

森本勲夫, 和泉元衛, 山下俊一, 大財 茂,  
久保一郎, 平湯秀司, 田浦紀子, 渡辺文治,  
佐藤賢士, 宇佐利隆, 前田蓮十,  
長瀧重信(長崎大一内)

(目的) リチウムの甲状腺ホルモン分泌抑制作用と<sup>131</sup>Iの甲状腺内停滯作用を応用し, Graves病でリチウムが<sup>131</sup>I治療効果を増強させるかどうかを検討した。

(方法) 未治療Graves病患者3名に<sup>131</sup>I tracerを投与し, その後7日目よりリチウム600mgを5週間投与した。リチウム投与開始3週後に治療目的で<sup>131</sup>I 1mCiを投与した。(結果) リチウム投与前の甲状腺内の生物学的半減期は11.5, 12, 11日であった。リチウム投与でこの半減期は3例とも無限大に延長し, 甲状腺からの<sup>131</sup>Iのreleaseは殆んど抑制された。

<sup>131</sup>I甲状腺摂取率はリチウム投与前後で差はなく, リチウムは<sup>131</sup>Iの取り込みを抑制しなかった。一方血中甲状腺ホルモンはリチウムにより明らかに減少した。また被曝線量が1151, 1734radであった2例はその後の再発はみられず, 690radの例は再発した。

(結語) リチウムはGraves病で甲状腺内への<sup>131</sup>Iの停滯を生じ, <sup>131</sup>I治療効果を増強させた。またリチウムは<sup>131</sup>Iの取込みを抑制せず血中の甲状腺ホルモンをも減少させるため, リチウムで治療しながら<sup>131</sup>I治療が可能であった。

#### 1444 一過性甲状腺中毒症を呈した慢性甲状腺炎 大口 学, 道岸隆敏, 利波紀久, 久田欣一(金大・核)

甲状腺中毒症を呈しながら, 放射性ヨード摂取率が非常に低値であり, かつ, 甲状腺の圧痛や赤沈亢進などの明らかな炎症所見を欠く7例(女6例, 男1例)を経験した。甲状腺中毒症は一過性であり, 全例とも針生検にて慢性甲状腺炎であった。その病態はついで検討した。組織像はfocalあるいはdiffuseな慢性甲状腺炎であり一定の傾向はみられなかった。なお出産後4ヶ月以内に発症したものが3例みられた。この病態は, 甲状腺ホルモン測定及び一般検査のみではバセドウ病や慢性甲状腺炎の急性増悪との鑑別が困難であり放射性ヨードによる摂取率測定及び針生検が診断治療上必須と考えられる。

#### 1445 甲状腺機能亢進症を呈した甲状腺癌肺転移

の1例

松田博史, 亀井哲也, 松本恵美子, 山崎俊江,  
立野育郎(国立金沢, 放)

機能性甲状腺癌は決して稀ではないが, これによつて甲状腺機能亢進症が生ずることは極めて稀とされており, 内外においても現在まで約30数例の報告が見られるのみである。我々は最近, 甲状腺濾胞腺癌が肺転移を起こし, 高度の機能亢進症状を呈し, 放射性ヨード大量投与が著効を示した1症例を経験した。

症例は59才の男性で, 4年前に甲状腺腫瘍の摘出術をうけている。その組織型は濾胞腺癌(濾胞腺腫の悪性転化)であったが放置された。54年8月頃より労作時の動悸, 息切れ, 及び体重減少を主訴に来院し, 高度の甲状腺機能亢進状態を指摘された。又, 胸部X線でびまん性の小結節状陰影が見られ甲状腺癌の肺転移が疑われた。<sup>131</sup>I 2mCi投与により残存甲状腺と肺野に同程度の集積を見, 又, 甲状腺全摘後も甲状腺ホルモン値は高値を示していた。<sup>131</sup>I 100mCiを2回投与したところホルモン値は正常になり, 又, 胸部X線の小結節状陰影も殆んど消失した。同時に合併した結腸癌とその肝転移により56年4月死亡したが, 剖検では2mmぐらいの甲状腺癌肺転移巣が散見された。